

One Up通信

日本を食べよう！

vol.3



お問い合わせ先 パルシステム山梨 長野 活動支援課 055-243-6341

カラー版はこちらから
ご覧いただけます



畜産の現状

去る2月25日にパルシステム連合会の方々を講師に迎え畜産の内部学習会を行いました。

昭和40年73%だった日本のカロリーベース自給率は今や38%に減っています（2023年度時点）。ちなみに山梨県はというと18%しかありません。先進国ではカナダ、オーストラリア、フランス、アメリカは100%を超えています。国は令和12年までの目標を45%としています。

日本の畜産の消費量は昭和40年に比べて約3.7倍になり、米は半減しています。畜産の自給率はカロリーベースだと64%ですが、輸入飼料による生産分を除くと26%になります。飼料のほとんどを海外に頼っていることになります。主にとうもろこし、小麦、大麦などです。お肉を作るためには「濃厚飼料」が必要になりますが、1kgのお肉を生産するために牛肉で穀物11kg、豚肉で5kg、鶏肉で3kgが必要になります。牛1頭から取れる牛肉は300kgなのです。すごい量の濃厚飼料が必要です。とうもろこしの輸入量は1,093万t（2022年度飼料穀物輸入量）。日本の米の生産量が679万t（2024年度/出典：農林水産省HP）です。小麦、大麦を合わせたら米の倍にもなります。

もし海外で自然災害がおきたり、戦争がおこった場合に輸入が出来なくなることもあります。そうすると日本の畜産は成り立たなくなります。肉自体をもっと輸入しなくてはならなくなるかもしれません。

飼料の自給率を上げる取り組み

日本人が消費する畜産物の食料自給率を上げるためには、牧草やデントコーン、稲を乳酸発酵させたホールクロップサイレージなどの「粗飼料」だけでなく、たんぱく質や炭水化物、脂肪などの栄養素を多く含む「濃厚飼料」が必要です。私たちの生活にも関わりがあるものとして「エコフィード」（食品製造副産物等を利用して製造された飼料）は濃厚飼料として推進されていますが、安定して活用するにはまだ難しい状況です。

課題推進チーム



パルシステム山梨 長野の理事会の年度方針・課題に基づいて4月から3月までの1年単位で活動するチームです。今年度は組合員5名、理事2名、職員2名の計9名で『わが家の食料自給率を上げよう！』をテーマに活動をしました。



内部学習会

畜産の現状と飼料の自給率を上げる取り組み

何より飼料の国内生産が課題ですが、近年の飼料自給率は26%強で推移しており増加していない現状です。家畜に必要な輸入飼料をすべて国内で生産しようとする、274万haが必要と試算されています（農林水産省「食料需給表」「耕地及び作付面積統計」等を基に農林水産省で試算）。とても大きな面積なので想像し難いですが国内の田んぼ面積は241万ha、畑は201万ha、つまり田んぼと同じくらいの面積で飼料を生産しなければ飼料自給率100%にはならないのです。国土の約2/3に当たる2,500万haは森林ですので、これから農地を大きく増やしていくことは無理難題です。

日本の地形や気候条件等から、飼料自給率を右肩上がりに向上させることは非常に厳しいですが、政府は対策を講じています。国内自給率粗飼料78%、濃厚飼料13%（いずれも令和4年度概算値）を令和12年度までにそれぞれ100%、15%に上げることを目標に農林水産省はじめ地方公共団体等が連携して推進しています。

具体的な取り組みのひとつに濃厚飼料である「子実用とうもろこしの生産拡大」があります。飼料用とうもろこしは、世界規模の異常気象やバイオ燃料としての需要、紛争や円安で輸入価格が非常に不安定な状況が続いており、畜産業の方々にとって見通しが立っていない厳しい現状があります。

濃厚飼料の国内生産は北海道が多くを占めていますが、生産を全国へ広げるために人材育成や大型農業機械に関する資格取得の技術指導や必要な資材の補助をおこなっています。また、担い手農家の経営安定化や麦や大豆、飼料作物といった戦略作物の本作化を進めるために、水田のフル活用を推進した農林水産省の「水田活用直接支払交付金」制度で子実用とうもろこしの栽培が広がりを見せています。とうもろこしは生産に対する労働時間が極めて少なく、時間あたりの所得は米の栽培に比べて高水準なので活用する農家が増えています。令和の米騒動の影響があり、この先制度が見直される可能性もありそうです。

飼料の自給率を上げる パルシステムの取り組み

＜パルシステムの産直4原則＞

- ① 生産者・産地が明らかであること。
- ② 生産方法や出荷基準が明らかで生産の履歴がわかること。
- ③ 環境保全型・資源循環型農業を目指していること。
- ④ 生産者と組合員相互の交流ができること。



①、②はスーパーのお肉でも、生産者の写真入りシールが貼られていたり、QRコードから生産方法や履歴がわかりますが、③、④を加えた4原則がパルシステムのこだわりです。そして、食料自給、環境保全、食の安全、食の豊かさを実現するために、国内の生産者と提携して、持続可能な日本型畜産モデルの推進に取り組んでいます。

具体的には

- (1) 地域の資源循環に配慮し、国産自給飼料の活用を進めます。
- (2) 動物の生きる環境に配慮し、薬剤に頼らず健康に育てます。
- (3) 食」と「農」をつなぎ、「いのち」と「環境」をまもります。



＜パルシステムの産直牛肉＞

「コア・フード牛」の飼料自給率（国内で供給された飼料に対する国内生産の割合）は100%です。

1/5が粗飼料、残りが濃厚飼料ですが、濃厚飼料も輸入に頼っていません。

自給飼料を積極的に活用し、食品副産物（おから、じゃがいも粕、ビール粕など）なども有効活用し、飼料に抗生物質を使用しません。

生産過程にも特徴があります。

一般的には、育成、肥育は別の経営体（3団体で分業）でおこなわれますが、「コア・フード牛」は一貫生産または生産者同士で素牛を売買するスタイルです。

＜パルシステムの産直豚肉＞

「日本のこめ豚」は2008年に供給をスタート。スタート時、仕上げ期（出荷前約75日）に10%の飼料用米を配合した飼料を与えていましたが、2015年には30%になり、2022年には飼料用米配合率40%へアップしました。

「日本のこめ豚」（ポークランドグループ）の飼料自給率は23.3%（重量ベース/計算値）です。

＜パルシステムの産直鶏肉＞

「米沢郷鶏」を生産している米沢郷牧場では、2008年から飼料用米の取り組みを開始しています。

配合比は前期（約3週まで）10%、後期（約6週まで）20%です。

「米沢郷鶏」（米沢郷牧場）の飼料自給率は18.9%（重量ベース/計算値）です。

＜パルシステムの産直肉を利用すると＞

2024年度のパルシステム全体の飼料用米は4,302t（見込み）。これにより4,302tの輸入とうもろこしが国産飼料用米に置き換わることになり、飼料自給率が向上します。

飼料自給率が向上すると日本の食料自給率の向上につながります。

そして、わが家の食料自給率もアップします。



1年を振り返って

課題推進チームの本年度は、自給率を上げるためにはどうすれば良いのか？身近なところから『我が家の自給率をあげよう』をテーマに学び考えてきました。

農水省の「やってみよう！自給率計算」から【ある日の食事】の自給率での違いを確認。内部学習会では山梨県農政部の方を講師にお迎えし山梨の農業の現状についてお話をお伺いしました。

『自給率！？ってどのくらい？身近な料理で体験してみよう』をテーマに様々な料理の自給率がどのくらいなのか？を計算し、お肉が入ることで料理全体の自給率が低くなる理由を知りました。

また、「畜産の現状」や「パルシステムの取り組みについて」の内部学習会をおこない、畜産物は国産でもなぜ自給率が低いのか？をパルシステム連合会畜産課の方々に教えていただきました。

通信は『One Up通信～日本を食べよう～』を2号発行し、今回の3号は最終号になります。これまでのご愛読ありがとうございました。

このチームでは今年度、内部学習会、調理イベント、オンラインでの会議などをおこないました。司会・書記は理事・職員の方々がしてくれ、内気な私は助かりました。

いつの間にか日本の自給率は4割を切りました。有事の際は生き残れない。以前、安さを求めすぎた商品に問題があったこともありましたが。消費者である私も見栄えだけでなく、安心安全を考えながら購入しています。令和の米騒動、本当に米はどこへいったしまったのか。これからパルシステムの商品を購入して、食卓の自給率を上げましょう！！

組合員活動の 交流会

Pal*パル*ぱるくみスペシャルデイに ブース出展しました！

多くの方に食料自給率に関心をもってもらえるよう、一般的な食事の食料自給率をクイズ形式で問いかけしました。当日は、子ども～大人まで幅広い年代の方にご参加いただきました。普段の暮らしの中で、どんな食事を選択すれば食料自給率向上につながるのかと一緒に考える機会となりました。ただ、試食したり施術を受けたりする体験型のブースが賑わうなかで、学習型の出展に足を止めてもらうにはもう少し工夫が必要だったと思います。食料自給率向上は大きな課題ですが、身近な我が家に視点を置いて実践していくと、案外気軽に取り組めることもたくさんあります。（例えば、アジフライを油で揚げずに、少し油を振りかけてオーブンで焼くと、カロリーカット&食料自給率も向上！）難しくとらえず、まずは関心をもつことから始めてみてください♪